

第三、父母の壓抑

り、第三、男女互に真心より相思戀慕し相敬重することなきも父母親族の干涉甚だしきに由り無理に仕方なく婚姻するも一因あり、人情に戻りて命令強壓を以て愛情を發せしむる事能はず、男の女を導くに於ても命令強壓は其用なし況んや外來的なる強壓に於てをや、文學博士末松謙澄君の譯にある「谷間の姫百合」第四卷三十九回も縁が半藏に逢ひたる時の話に由て之を知るべし、

一例

「……あなたがどうかして無理往生に私を手込めにして妻にして御覽なきに其れがあなたに何の益に立ちませうか打明けて云ひますか私に心からあなたに離れ氣はありませぬから私に常におなたから一生を代なしにせられたと思ひあなたを憎く思ふ外はありませぬあなたに其れ程までにして私を妻にして何の得が有りますか又……」なぜと申しても何も金銭づくや身分の違ひの爲めでありませぬ私の親里が家も富み位も高しあなたに家柄身柄が丸で遠くて居るなぞと云ふやうな卑い考の爲めではありませぬ唯私の心はどうしてもあなたに傾きませぬからです私に是迄あな

第四、利益の目的

たの事を思はなかつたこと云ふ譯けてはありませぬが世の中の乙女子が一生身を任せやうと思ふ人と思ふ様に思ふ事はありませぬ、斯かる心を以て婚姻するに於ては其久しからずして破却するや明かなり、左れば父母の命令も互の戀愛なき處には必ず其効なきや疑ふ可からず、第四、財産を望み門閥を欲し即ち利益を目的として兩者互の戀愛に訴へざるものあり、婚姻するに當りて門閥、貧富、位地等のみ頼着し真正なる戀愛の情緒を結ばずば直ちに離縁に至るも無理ならず、凡そ思想の發達精神の善美を度外とす、財産の貧富も懸念するの婚姻は未だ不完全なるを免れざるなり、第五、容貌の妍妍なる所に懸戀し其精神の美妙を訪はざるものは其れより他も美貌のものを見るときは其れに就くの恐れあり、蓋し花の色は久しからずしてうつり行くものなり、第六、藝術

第五、美貌に頼着す

第六、藝術の巧妙に懸念す

第七、一時の勇氣に感す

の巧技に懸念するもの例へば俳優、淨瑠璃語り等も戀を運ぶものは其藝を忌むに至るか又は其れよりも勝りたる藝者あるとき其れに就くの恐れあり、第七、一時の勇氣に感じ又の憐れみを受けたるより妻となるものも其不完全なるを免れず、此戀の世上の味を辨せざるもの例へば深窓の下に養われたる女子に多し、世も令息令嬢の不潔の戀愛に沈むを恐れ少しの樂みも見知らせず人の前杯には出てざる様に養育するものあるが是れ等一旦世に出てたるときは萬端新奇も見ゆる折柄なれば迷ふ事甚だしきものなり、余は又「谷間の姫百合」より一例を擧げん、

「私ハ人知れず毎日、其人に出逢ひました彼れ私を羨しと譽め私ハ之を嬉れしと思ひ彼又私を好いたと語り私ハ別に怒りもせでふれを開きました私ハ今でもあなたに誓つて言ひますが實は何の思慮もなくしてなした

る事ばかりで唯目耳の新しきこと、彼の我にかしづく様にするのに氣が染みたまでにて其人の人柄に心が移つたなど云ふことでは少しもありませぬ私ハ其人を思ふた事ハ滅多にはありませぬ唯々其話に氣を奪はれたのです……私ハ其話のことばかり思ふて遂に其人の見ず知らずの旅人なることを忘れてしまひまして最初ハ唯々眞の時代の慰みなりしも果ハ彼に逢ひ彼の話を聞かれれば其日が立ち兼ねるやうになりました琉璃さん私ハ遂に其人に今あなたに私の手を握らせて居ますやうに手を握らせて其上遂には其妻になるやうに約束までしました……」

是れ番に小説家の空言として見るべきものよ非也、不完全の戀多くの此轍を蹈むものなり、藝術も巧みなるものを見て之れを戀する如きの全く此理も外ならず、未だ比較的の思想生ぜざるに由るものと云ふべし、第八、意氣相投せず同氣相求めず愛情更らぬ煥發せざるも父母の遺言又の親族上の義理算談より止むを得ず婚姻する如きも決して永續するものに非ず、然らば即ち如何にして戀愛の目的を達す

第八 義理算談

如何にして  
戀愛の目的  
を達する乎

るや、曰く父母の許せる情交を爲し互に久しく馴染み双方  
れ、心底を知り誠の戀愛を以て社會上の善美とする道徳は  
則り一國に規定せられたる法律に従ひ腦中より常に敬重、  
純潔、壯麗等の觀念を惹起せざる可らず、今般新たに發布せ  
られたる民法人事編第四章「婚姻」の中第一節「婚姻を爲すに  
必要なる條件」を左に記さん但し其詳細は民法を一讀して  
知るべし

民法婚姻を  
爲すに必要  
なる條件

○男は満十七年女は満十五に至らざれば婚姻を爲すことを得ず○配偶者  
あるものは重ねて婚姻を爲すことを得ず○夫の失踪に原因する離婚の場  
合を除く外女は前婚解消の後六ヶ月内に再婚を爲すことを得ず、此制禁は  
其分婉したる日より止む○姦通の原因に由りて離婚の裁判を言渡された  
る曲者ハ相姦者と婚姻を爲すことを得ず○直系に於ては尊屬親と卑屬親  
との間婚姻を禁ず○傍系に於ては兄弟姉妹及び伯叔父姑舅姪の婚姻を禁  
ず○直系の姻族の間は其關係の止みたる後と雖も婚姻を禁ず○養子と養  
父母又は其尊屬親との間及び養父母又ハ其尊屬親と養子の配偶者又は其

昇屬親との間は離婚の後と雖も婚姻を禁ず○子は父母の許諾を受くるに  
非れば婚姻を爲す事を得ず。父母の一方が死亡し又は其意思を表する能は  
ざるときハ他の一方の許諾を以て足る。繼父又は繼母ある場合に於て其配  
偶者たる母又は父の死亡し又は其意思を表する能はざるときは繼父又は  
繼母の許諾を受くべし。其許諾に就てハ第九章第三節の規定を適用す○父  
母共に死亡し又は其意思を表する能はざるときは其家の祖父母の許諾を  
受くべし。祖父母の一方が死亡し又は其意思を表する能はざるときハ他の  
一方の許諾を以て足る○父母は祖父母悉く死亡し又は其意思を表する能  
はざるときは滿二十年に至らざるもの限り後見人の許諾を受くべし○  
父母の知れざる子は二十年未滿に限り後見人の許諾を受くべし○育児院  
に在りて父母の知れざる子の婚姻は二十年未滿に限り院長の許諾を受く  
べし(以上三十條より四十二條に至る)

女子一生中  
最幸福の  
時期

前きに女學雜誌二百三十二號の紙上に「女子一生中  
最幸福の時期」と題しシヤンドラー、モルトン夫人の言なりとて  
記せるを見たり、曰く「婦人にして最愛の良人を得ずバ思ふ  
は眞正の幸福をば知るまじ妾の考ふる所によれば其良人

に伴ふときを以て最も幸福なる時となす人或は閑園に静居し芳草美花の内に樂しき日を送り得べし又或は不幸にしてよからぬ人と結婚せし人嘆じて云ん寧ろ嫁せざりし方幸ひなりしならんとされど斯かる人は未だ真正の幸福の何たるを解せぬ人と云ふべし思ふに妾の思想は古るめかしかるべしされど妾は如何にしても眞正の幸福は女子が最愛の良人と左提右携して樂しき月日を送るときにありと云ふの外考ふる能はずと、余は男子も於ても最愛の婦人と樂しく月日を送るの時を以て幸福の時期なりと信するなり、實に

鳥もなく鐘もきこえぬ里もがな  
ふたり寝る夜の隠家おせん

人生上最大不幸の時期

と思ふ事のある時なるべし、  
若し夫れ良夫婦の親しき交りを以て幸福の節とせば離縁なるものは最大過失不幸極まるの時と云はざるを得ず、何となれば是れ前者と正反對立つものなればなり、余は既に離縁の原因を述べたるが爰に少しく離縁に對する條例法律を記し併せて理想的戀愛を説明せん、(左に記するも横山雅男氏の婚姻論に由る)

英國及びスコットランドの離婚條例

英國にて實施し居る條例ハ第一、妻の密通、第二、夫の奸通及び妾に對し苛酷の處置を爲したる時、第三、奸通の上二年以上出奔して歸家せざる時等あり、  
スコットランドの法にては夫の奸通のみにて離婚を乞ふを得、而して四年間夫の家を脱し知れざる時も同様、又妻も以上の事を犯す時ハ夫より離婚を乞ふを得、其の外、夫に嫁し數婦を娶るハ元より離婚の原因なり、  
佛國にては第一、妻の奸通又ハ夫の妾を同屋に蓄ふる時、第二、夫妻何れにても殘虐無情を極めたる時、第三、重罪の刑に處せられたる時、第四、双方同寓

大寶令

すべからざる事故ある時、(但し最も嚴に制限したる場合に限る) 我國にては大寶令に由て見るに夫の離縁を爲す事を得る場合は○妻の奸通を爲したる時○妻の悪疾ある時○妻の舅姑に事へざる時○妻の妬忌を爲す時○妻の窃盜を爲す時○妻の口舌を爲すとき○妻の年五十以上子なき時、

右の場合あるも左の事情あるときハ例外とす(妻を離絶したるときは此限りに非ず)○妻を娶りし時賤く後貴くなりたるとき○妻の舅姑の喪を扶持したるとき○妻に於て受くる所ありて歸る處なき時、

妻離縁を爲すことを得る場合○甲、結婚既に定りて未だ成らざる時○夫の徒罪以上を犯したる時○婚禮故なく三ヶ月成らざる時○夫の逃亡して一月還らざる時○夫の外國に没落して一年還らざる時○乙、結婚已に成りたる時○夫逃亡して出てざる時、子ある時ハ五年、子なき時は三年○夫外蕃に没落して還らざる時○子ある時ハ三年、子なきときは二年○夫妻の所爲に由り離縁をなさざるべからざる場合○夫義絶の所爲ある時○妻義絶の所爲ある時、夫妻は左の親族義絶の所爲ある時ハ離縁を爲さざる可からず、祖父母、父母、外祖父母、伯叔父姑、兄弟、姉妹、

又徳川の律に從へば離縁を爲すを得る場合ハ○夫ハ妻の財産及持參金を返付する時ハ妻と離縁すること隨意たるべし但し他の婦女を後妻となさんと爲め先妻と離縁することを得ず○妻は夫に添ひ離き事情あるにあ

徳川の離婚律

日本民法の離婚律

らざれば離縁を爲すことを得ず但し夫妻親元に歸り三四年を過くる時ハ夫妻の離縁を拒む事を得ず○夫妻の外の人の意に任せ離縁を爲し得る場合○夫妻の同意なく衣類等を典する時は男に於て離縁せしむる事隨意たるべし○離縁を爲さざる可からざる場合○妻親の同意なく又離縁状を取らず夫家及親家を立出で他の男を持つ時ハ法律上離縁せしむ、

又今度新たに發布せられたる民法にてハ離縁ハ左の原因あるに非ざれば之を請求する事を得ず○姦通但夫の姦通ハ刑に處せられたる場合に限る○同居に堪へざる暴虐脅迫及び重大の侮辱○重罪に因れる處刑○窃盜、詐僞取財又ハ猥褻の罪に因れる重禁錮一年以上の處刑○惡意の遺棄○失踪の宣言○婦又ハ入夫より其家の尊屬親に對し又ハ尊屬親より婦又ハ入夫に對する暴虐脅迫及び重大の侮辱、

余輩は民法の中に夫の妾を蓄へし時の事なくして却て「但夫の奸通は刑又處せられたる場合」とあるを見るときは一目して封建の餘風、並びに男子の不道德なるもの多きを察せらる、兎に角、一己人の私意を以て己れの意に適せざれば朝に婚して夕に三行下を興ふる如き乱暴手段の廢せられ

法、庭、に、訴、へ、て、請、求、す、る、を、得、る、に、至、り、し、は、文、明、の、賜、と、云、べ、し、惟、ふ、に、道、徳、も、法、律、も、強、者、之、を、造、る、故、に、強、者、の、意、に、適、し、弱、者、の、意、に、適、せ、ざ、る、は、今、日、の、程、度、に、於、て、止、を、得、ざ、る、の、次、第、と、こ、を、云、ふ、べ、け、れ、余、輩、は、離、婚、の、如、き、不、快、の、も、の、は、除、去、せ、ら、れ、益、々、精、密、且、つ、美、妙、に、戀、愛、の、進、化、し、社、會、國、家、の、隆、ん、なる、を、望、む、な、り、

理想的の愛

斯の如く戀愛進化の程度の學理上習慣上法律上明うに之を見る事を得、ポロロ曰く「愛は寛忍を爲し又人の益を圖るなり愛は妬まらず誇らず驕傲らず非禮を行はせ己の利を求めず輕々しく怒らず人の惡を念はず不義を喜ばず眞理を喜び凡そ事包容おほよそ事信じ凡そ事望み凡そ事忍ぶなり」と、男女兩性の戀愛上に若し夫れポロロが論ずる處の

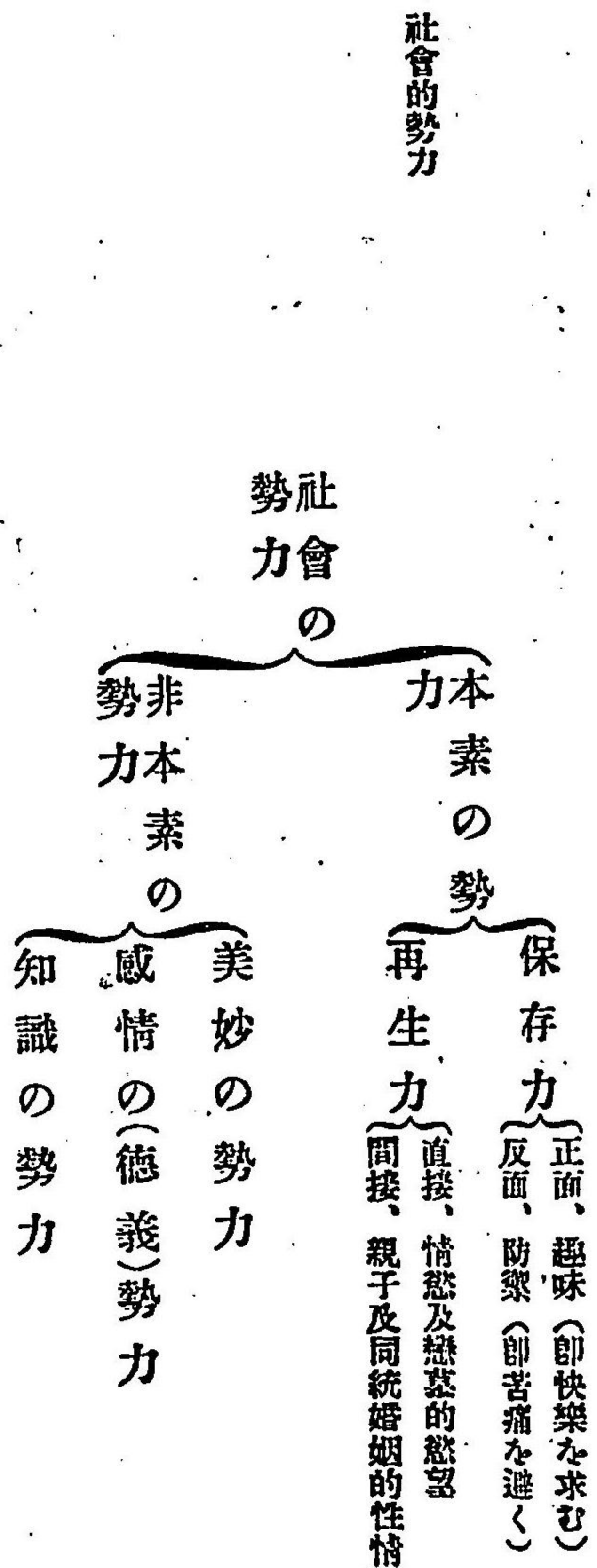
趣味入り來らば余は之れを以て理想的戀愛なりと云はん、斯の如くなれば實に戀愛進化の頂上なりと云ふも敢て不可なからん、

社會の活動  
及び生活

第八章 戀愛と社會進歩の關係

吾人の社會と生活しつゝ、集合する人類の或る必要と適  
合とを以て分勞し、交換し、協合するより變化活動を始むる  
ものなり、而して社會の一の有機物なれば將さる生活體の  
組織を有するなり、社會の生活の大別して八種とせ、第一言  
語、第二技術、第三科學及び教育、第四家族の生活、第五遊戲其  
の他よりの朋友等の交際、諸政黨、又思想交換の爲めの種々  
の集會、第六宗教的生活、第七政治的生活、第八經濟的生活即  
ち是れなり、是等の要素の社會の發達と共に發達するなり  
換言すれば是等要素の發達の即ち社會の發達なり、其の發  
達するや生物及精神の法則に從ふものなり、故に社會構造  
の疎密に從て社會的生活の情狀を異にするものなるや明

かなり、然り而して是等の生活を現出するは人間に慾望の  
存するが故なりとす、慾望の吾人を活動せしむる動機なり、  
社會學上より見るときは、則ち社會の勢力なり、ワードの左  
の如く區分せり、



是等の勢力の存する限り社會的生活の絶對に静息する

保存力

ことなく絶へず進退して常に波行的の運動を爲すものなり、右類別表中本素力は肉體的に關するものにして飢渴の感の如きは最も強き勢力を有するものなり、食物は最先の需要物として衣服之に次ぎ住居之に次ぐ、是等三者は人生一日も缺く可からざる要素なり、實に社會を保存し守護するものなれば保存力と云ふ、保存力の斯の如く最大要素なるもの之れのみにして社會の永存せず、故に再生力の必要あり之れ等二者を俟て始て社會は組成せらるゝなり、然れども是等は所謂盲目的の激烈なる勢力なれば之を指揮し之を満足せしむるもの必ず其外よなかる可らず、非本素の勢力との即ち本素の勢力を満足せしむるの手段なり、衣食足りて後ち禮節を知るとは即ち本素力の足りて後ち非本素

再生力

一個人及び社會に於て本素力非本素力を兼備せざる可らず

力よ及ぶと云ふに外ならず、之れ自然の順序なりと雖も今日に至ては非本素力なる智力、美妙力、感情力の如何に由て衣食住男女の關係を左右するに至れり、世上本素力は重きを置き以て不足なきも敢て非本素力に對する觀念少なきものあり、田舎の豪家、有福の商工人の如し、非本素力も重きを置きて本素力に熱中せざるものあり、東洋流の學者、空論的の書生の如し、要するに前者は其志を弱くし其骨を強くす、其の志を虚にして其の腹を實とする老子の治國主義に傾き、後者は美醜善惡眞偽の議を爲し空論放言傍若無人下宿樓上借金取に圍まれて道德論を爲す如き傾向あり、故に一個人も社會も一方は偏黨せず、本素力非本素力共に兼進せざる可らず、此篇に於ては先づ非本素的なる智識力は指

此章の眼目



## 社會の目的

揮するの力にして進歩的なるを論じ、感情即ち徳義力は鼓舞する所の力にして秩序的なるを説き、而して戀愛は秩序的にして又鼓舞するの力あることを説明せんとす、  
 社會の目的は幸福を得るにあり、幸福は社會の進歩より得べく、進歩は行爲より來り、行爲は意見より起り、意見は智識より生じ、智識は教育より來るものなり、夫れ吾人の行爲を鼓舞するものは感情にして之を指揮嚮導するものと智識力なり、故に吾人の種々の慾望は理性(智力)の指揮に従ひ良法を得ざれば仕遂げらるゝことなし、

## 智力の要素

夫れ造化は人類の祖先にして無機物有機物の所有者なりと雖とも人力を用ゐずして使用せらるゝものは光線、空氣、水の如き小數に過ぎず、故に氣候、地性、水量上の如何は吾

人日常の經濟生活に莫大の關係あるを知り併せて人間罪惡の増減と直接間接の苦樂は大に外界の境遇に關するものなるを知らば、天然的勢力及び事物に對する智識の要するを感ずるなり、天然物は産出にして人爲物の製作するなり、前者は人心に關係することなくして運動したる結果なり、れども後者は人間意匠の妙構より製作したるものなり、山川草木禽獸蟲魚の如き單純なる分子より連續して漸々波行的に進化したるものは即天然的なり、此天然物を彼れより之に取り之を彼に代へ彼を之に造るは人爲的なり、而して吾人の社會は天然力と精神力の合して成りたるものなり、故に社會の文明の度の天然力を利用するの多少に比例するが如し、彼の人生に莫大の利益を與へたる蒸氣機關、船

## 天然力の使用

受動的發動的進歩

船、鐵道、電信機、寫眞術、其の他工藝上の機關は皆技術なれば偶然產出したるものに非ず、悉く智力(理性)の結果なり、最先の人類の唯外界の刺激に應じて運動し敢て人為を用ゐられざるが爲めに單に受動的(他動的)に止まりたり、之れ智力の缺乏せるが故なり、今日は方法的の經驗組織的の知識なる科學の力を借りて社會の活動に應用し、發動的(自動的)に天然物を利用し、以て巧妙の技藝を隆んにせざるべからず、科學的の知識は單に愛に止まらず、人間の能力を練習するに最大力を有するものなり、而して能力を練習するは快樂を得るの要素なりとす、此智力は進歩的にして過去を記憶し、現在を知覺し、未來を想像するの能力なれば感情及び美妙の力と相分離すべからざるものなり、知識の要斯の如く大

智力は進歩的なり

智情相保

なりと雖も之れのみにして完全なるものも非ず、若し夫れ單に知識のみ偏せんか、老子の云へる如く「民之難治以其智多故、以智治國、國之賊、不以智治國、國之福」の憾なき能はず、故に殆んど絶對的に智識のみを隆ならしむるも當を得たりとすべからず、之に對する徳義即ち感情の必要を感ずるなり、

感情力の要素

余輩の既に智力の進歩的にして社會の進歩に與て力あることを述べたり、又智力のみにては決して完全するもの非ざるを説けり、必ず之と相對する徳力即ち感情力なかる可らず、抑も感情の智力體力の發達と共に其正當を得るに至るものなり、夫の童子の感動は外觀上甚だ大なるが如しと雖も深く之を觀察する時の其の感ずる所の境界極めて狭小

人間感情の進化

なり、適々一事に就て喜ぶも頃くして頓に氷散し、反りて忿怒し、頃くして又喜び、一變一轉極て容易なり、其忿怒し悦樂する所のもの、單々食餌玩物等に過ぎず、之より成長して壯者となる、至ては飲食男女の情感の外、家族を愛し、郷土を慕ひ、國家を懷ふの感起り、更に進んで學術を愛好する所の高尚優美の情を發するに至る、是れ智力體力の發達と相關係するものなり、然りと雖も世に感動的人物なるものあり、その盡す可きの方法爲すべきの順序を知らずして或る事を慷慨悲憤するもの即ち感情に多く頼りて以て運動するもの之れなり、國家社會を愛せざるもの誰うあらん、之を知るも如何にして愛すべきやを知らざれば從て實地に動作すると能はざるなり、夫の硝子窓の透明體なるが爲め

感動的人物

に一樣の空間と見誤り之を通過せんとして疲勞する蒼蠅は智識の淺薄なる感動的人物にさも似たり、故に感情の智識と相對相關するの要ありと雖も智力を借りざれば正當なる感情を得べからず、今日の社會の昔時のマホメツド、

社會上感情の進化

ウロ、グロアスター時代の如く猛烈なる感情を以て輿論を造出し空漠なる未來の想像を以て満足せざるなり、然れども感情は秩序的勢力として必ず正當に發達するを要す、

宗教道德の仕組

感情の説明を爲すの心理學者の職分なれば爰に其中最も著しきものに就て一言するのみ、第一、感情的傾向を帶び且つ常々感情を依て組織せらるゝもの、蓋し宗教道德の仕組に若くものなかるべし、元來宗教道德の仕組は靜學的性狀を帶んで活動的の分子を含まざるなり、故に宗教も

は厭世的の分子多くして革命的の分子少なし、適々之れあ  
 るも元來の性質に固有するに非ずして他動的に附着した  
 るものなり、一言すれば宗教道德の仕組の非進歩的なり、之  
 れを實用に供せんよの自由の思想を發達せしめざる可か  
 らず、思ふよ感情より來るものは秩序的よして智力より來  
 るものい進歩的なり、宗教道德の仕組に種々の本尊を置き  
 之れに由て安身するは將又主觀的想像よして客觀的社會  
 に應用すべからず、宗教の要の進歩的智識よ對して秩序的  
 として要するのみ、宗教の念は人を結合せしめ固着せしめ  
 堪忍せしむるものなり、然れども一轉して智力を等閑にし  
 單に聖經の儘を信仰するときは牡蠣或の珊瑚蟲を以て鷹  
 又の羚羊より遙かに幸福なりと考ふるが如き觀なき能は

大體之  
 首目此身を  
 欲らざる  
 多量運  
 行

同情の感

ず、枝折りせで尙ほ山深く分け入らんうきこと聞かぬ所あ  
 りやと躊躇するに至るなり、第二、同情の感の決して廣く行  
 はるゝものに非ずと雖も此情の必要なる言を俟たずして  
 知るべし、慈善の事業、即ち救助會の如き義捐金の如き又朋  
 友の交際上、夫婦の戀愛上、國家の和合上よ於て凡人の見得  
 べからざる妙へなる力あるものは同情の感なり、同情の感  
 は人を活かすものなり、惡きものも惡からざるよ變せしむ  
 るは此情にあり、之れよりして社會の秩序を保つ事實に著  
 大なりと云ふべし、糊口に苦み、餓學道に横はるときに於て  
 傍觀袖手するの冷淡者のみなりせば社會の秩序、整然たる  
 ことなし、治者、被治者、貴族、平民、貧富、強弱の正當よ相保して  
 進歩するは感情即ち徳義あるが故なり、單に不確の智識に

同情の必要

傾向するときは夫の虚無黨、社會黨、共產黨の如き現出を免れず、其等の現出を防ぐの要は上下貴賤を通じて同情の感を隆ならしむるゝあるなり、

秩序的運動  
と戀愛

爰に宗教の念、同情の感に勝りて國家の秩序的運動を助くるものあり、戀愛の情即ち是れなり、此情の管に秩序的運動を助くるのみならず國家社會の繼續上に最大關係を有するものなり、戀愛の國家社會に對する關係の第一、秩序的運動を助くるにあり、第二、再生力の關係にて子孫を繁殖し國家社會を繼續するゝあり、左に少しく述べんとす、

戀愛の性質

余輩は先きゝ戀愛の性質は行動力にして反動力ゝ非ず、靜動力ゝして活動力に非ず、徳力ゝして智力に非ることを述べたり、夫れ情欲と一の火なり、其の行動するや盲目的な

戀愛の行動力

り、道理性と一の水なり、然れども情火の隆んるときと道理の水之を消す能はざるゝ至る、夫の不潔の淫猥ゝ陥り妻子を捨て、妓樓に出入し姦淫の空氣をして壯々浦々ゝ蔓衍せしむると單に盲目的の行動力なるが故なり、而して戀愛の行動力、其の人の貧富に由て差あり、概して貧なるものは高尚の快樂を得る能はざるが故、戀愛の情に重きを置かずして肉欲的の快樂を欲するに至る、下等社會の淫猥ゝ陥るは之れが爲めなり、換言すれば文學上の快樂なるもの少なく精神的教育の備へらざるが故に類の友となりて境遇甚だ不良に陥り恰も獸類の如く(智識少なきより)本能的の作用にて肉欲に重きを置くに至るなり、又靜動力として見るときは大に堪忍の心を發するを知る、兼好法師云へ

戀愛の靜力

らく「身を、しども思ひたらず堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へ忍ぶの唯色を思ふが故なり」と詩歌小説のみならず事實上に於ても戀愛の爲めに貞操を守り淑徳を保たんとして非常の痛苦艱難を忍び堪ゆることを表はそなり、堪忍の心情の秩序的の性質を帯ぶ者なり、家にあり又の旅路にありて夫の妻を慕ひ、妻の夫を慕ふの情、又父母の子女を懐ひ、子女の父母を慕ふの情の感情中最も麗しきのみならず最強勢の者なり、而して統計學上より見るも此等の慕ひ懐ふの情の柔和温順同情堪忍の傾向は是等の傾向の即ち秩序的なり、秩序的なるが故に静狀力あるや言を俟たざいて明かなり、故郷の空を懐かしく思ひ、外國にありて生國の慕ひしくなるの之れより發出したるもななり、父母を愛せ

## 戀愛の徳力

ざるもの子女を懐ひざるもの悪んぞ邦國を愛するの念あらんや、又徳力として觀察するときの戀愛の社會上に最大の關係を有すること更らば明かなり、世上智育の比例に徳育の進歩せざるを嘆ずるに至れり、之れ大に戀愛の關係にあるなり、兒童の學校に在て授かる修身訓の未だ其の芽を發せざるに家族的社會的境遇に影響せられ石地を播きたる種と變ず、學校の赤くなるを望むも社會の境遇の之を紫にせんとす、教師頻りば剛毅、忍耐、敢爲、壯高、偉大の分子を吹き入れんとするも社會の境遇の不潔を導かんとするの傾向あるなり、人心の猶ほ水の如し、故に器を由て其の形を變ず、管又兒童に止まらず少年となり壯年となりて尙ほ獨立不羈にして意志の剛強なる人に非れば水面に漂ふ處の萍

個人の道徳  
と社會の道徳  
の差異

の如く朝夕其の社會の制裁力にのみ支配せられ社會の境  
遇に影響せられて屹然として意表に立つの氣力を失する  
に至る、而して社會の道徳は個人の道徳より低度位する  
ものなり、故に不潔の念汚穢の情ある人の直ち枯草に火  
の轉するが如く速く其情念に應ずるもの來る、爰に於て不  
潔の人柔弱の人として一旦改新する事なくんば益々不潔  
汚穢に陥るなり、之れ個人の道徳の標準より社會現象面の  
道徳の標準低度なるに由る、夫れ然り而て最も不道徳に流  
れ不信用を得、所謂仁義道徳上の破乱者とならしむるもの  
の不潔なる戀愛の力なり、まことと愛着の道その根深く源  
遠し六塵の樂欲多しと雖も皆厭離しつべしとが中にたゞ  
かの惑のひとつ、やめがたきのみぞと兼好法師の云へるも

大利あるも  
の大害あるも  
を免れざる  
乎

理ならずや、世は益あるもの戀愛の情感も若くものなく世  
は害あるもの亦戀愛の情に若くものあるなし、一轉すれば  
萬物の靈たる資格を得、一轉すれば單純なる一個の動物と  
なる、其の轉變する妙機を教へ天真良善の方向を取らしむ  
るものは教育の光あるのみ、斯の如く戀情の行動力なり、靜  
狀力なり、徳力なり、故に秩序的性質を帯びて社交上の調和  
を爲すものなり、戀愛は社會の秩序的運動に與て力ある事  
既に明かなり、之より再生力の關係を少しく論せん

吾人の慾望中衣食住に關するものは最も強きものにし  
て一切人間行爲の動機となる中最大の勢力あるも此なり、  
爰に又夫と相對して前者に劣らざる一大勢力あり、即ち再  
生力、而て、此二大勢力は心理學社會學上緊要の問題なり、彼

保存力と再  
生力の比論

の「活動社會學」の著者米國の學士レスター、イフ、ワード氏此  
 二大勢力を比論するの段大に余の意を得たり、氏曰く「保存  
 力の特務の身體の生命を保存して種族の消滅を防禦し、再  
 生力の特務の各個人の再生力に由て其の種族の絶滅を防  
 禦するにあり、要するに前者と現在に對て作用し、後者は未  
 來に對て作用するものなり、即ち前者の一個人を保存し、後  
 者の種族を保存す、換言すれば前者の職分は概して身體上  
 正當の連續を保護し、後者の職分の新時代の萌芽を各人よ  
 り展開するにあり」

## 二大方の應

「生物學上より見るときは右二大方は車の兩輪の如く共  
 に必要にして欠く可らざるものなれば其の輕重を比論す  
 べくもあらず、二者共に種族を繼續するに於て絶對的の必

保存力の應  
報と再生力  
の應報

要物なりと雖も夫等より來る所の影響に於ては甚だ差異  
 あるものなれば常々注目して之を觀察せざるべからず、思  
 ふよ保存力の作用と再生力の作用よりも社會上の進歩に  
 與て力ある事の素より著明にして更らに言を俟たざるな  
 り、前者は社會上にある凡て廣大なる工業經濟及び所得上  
 に關する運動の下にある所の潛勢力なり、故に凡て進歩的  
 制度、富、發明、及び世界の文明は保存力に關するより重きに  
 來れるや明なり、後者の之に反して時は激烈なる動作を  
 惹き起すとあるも富の生産或は思想の發達に對して直接  
 の關係を有する者に非ず、其の影響は外部に非ずして内部  
 にあり、即ち創造的に非ずして摸型的なり、要するに前者の  
 正當なる應報は人間の新且つ優美なる能力を満足し之を



愉々快々ならしめん爲めに新奇にして最も総合複雑したる事物を準備し益々高尚の境に導き以て幸福を組成することとなり、後者の正當なる應報の靜穩且柔和にして純粹精美なる愛嬌を社會上に注入することなり、人生上之れ無くんば凡て餘他の悦樂も悉く淡泊にして味氣なきに至る、換言すれば一に社會の實用に關するものにして、其の歴史の自然界の上に大胆且つ確固たる侵入を爲したることを發表し、他の一に重むる改革の前より立てば保守的の怯怖即ち憶病を以て現はれ進歩を對しては更らざる關係なきを表現すが如し、云々、氏の説は將さに余輩と轍を同するを見る即ち社會の秩序的運動を爲さしむるの一大勢力なることを知るなり、

社會の進歩  
と秩序

夫れ社會に秩序なければ進歩亦有ることなし、二者並行して始めて社會の隆運を來すものなれば其の結合決まて分離すべからず、草木及び動物の如きも其生命は體制のありて保存するものなれば一旦之を破壊せば生を保存する能はずして忽ち枯死する如く人間の社會も秩序なる體制ありて始めて進歩するなり、故に此秩序を傷害せんか忽ち進歩を止め衰敗するや明かなり、然れども現に存する秩序よりも高尚に且つ正格なる秩序あれば其秩序を定めん爲めには現存の秩序を犠牲に供するの心掛けなくんばならず、智力上の科學、言語、技術、文學、如きもの重むる進歩的勢力にして感情上の宗教、道德の仕組、同情の感、戀愛の情の如きもの秩序的勢力なり、爰に於てゼリフイの所謂文明とい

進歩的勢力  
と秩序的勢力

行動力と反動力、活動力と靜狀力、徳力と智力の並行發達なりと云へることの余輩を欺りざるを知る、思ふに文明の思想に依て導かれたる人間労働の結果なれば社會の進歩を計るに、宜敷天然の理法に従ひ人爲の淘汰を用ゐざる可うらず、今日に至るまで技術及び科學の形而下的物質界の現象に應用せられたる事あるも道德上及び社會上の現象に應用せられたること殆んど皆無と云はざるを得ず、吾人の今後に勉むるもの、即ち此應用にあり、

戀愛は一の社會力なり

斯くの如く論じ來れば戀愛の情の智力と相對せるものにして一の社會力なること明かなり、社會國家の進歩は秩序的ならざるべからず、戀愛の秩序的運動を爲さしむるものなり、衣食住に關する者は保存力にして進歩的と稱する

國家主義個人主義と戀愛の關係

を得ば戀愛的關係の將に再生力にして秩序的なり、一は個人を保護するに要ありとせば他の種族を繼續するに欠く可からず、社會上に關する戀愛の性質大凡斯の如し、

附言——余輩の既に戀愛の情の大社會の秩序的進歩に力あることを述べたり、同時に同情の感、宗教の念等も亦前者と同トく保守的分子を含有するものなるを論せり、爰に余輩と其の意を同ふせる論者こそあれ即ち彼の「家族論」の著者ス・フリング氏なり、氏は家族を以て社會の秩序を保存する一大力なりと論せり、余輩と家族てふものを正當に組成するは正當なる戀愛より成るものなるを信するが故に氏の所説の一步を進めたる社會學的の觀察にして余輩の所説は一步を退きたる心理學的の觀察なりと信せざるを得

個人主義の利害

す、

氏曰く、夫れ一個人が斯く貴重せらるゝに至りしは實に悦ぶべき事なり、何となれば、是れ近世々界の貴き進歩と相沿ふて走り以て生活の諸方より利益と進歩とを惹き起し正義及び眞理の爲めに働く所の勢力をして益々振はしめられたればなり、然りし雖も又一方より云ふべきは甚しき危害之と伴ひ來り其惡しき結果の既に世に現はれたる者もあり、彼の歐洲各政府及び米國々會等を脅嚇せる社會黨の主義の如きは實に個人主義の過長して各人皆自己外の人の權利を或は陰かに或は陽かに輕蔑嘲視するよりして起りしものなり、既に斯の如くなるに及んでハ一個人は皆己が社會の秩序を保つ所の一員たるを忘れ、又彼れ若し社會なる體より或る權利を要求せ得るときハ彼亦其の體に向て或る義務を負はざる可らずとの理を思はず、是に於て國の法律を輕んじ一揆を好み亂暴を爲すこと殆んど常の如くなるに至る、彼の千八百八十四年の春シンシナテ反逆の如き或は千八百八十六年の春シカゴ土揆の如き唯是れ個人主義の過長誤用より起る結果たるに過ぎず、

家族の社會的保守的要素なり

此傾向よりして生ずる惡結果は、實に國家の上に及ぼせるのみならず家族の上にも亦害を來せしむること明かなり、抑も家族は最も純潔にして且つ永續せる勢力の湧出する源泉なる可きものなるに拘らず全く其の社會上の單位として存すること能はざるに至りぬ、社會ハ最早其貴き常恆の有様を保存する最要の元素を失へり、即ち社會の秩序を支ゆる者没落せり、家族ハ實に保守的の傾向あり、個人ハ急激進歩的の傾向あり、彼の英國政黨に於ても保守黨は重きに家族に眷戀するの情強き人々より組成せられ、急進黨は其過半は個人主義を重んずる人々より成る、斯の如くふれば合衆國に於ては特別に保守勢力の必要を感じ、家族を以て再び元の如く社會の單位とせんとの希望甚だ強盛なるに至れり、

家族復舊に適當なる最良の方策

以上論じたる次第なるが故に家族を復舊して高尚なる地位に至らしむる運動は實に家族より生し來る善良の勢力を社會に漲らしむる爲にも又は不正有害なる個人主義を壓抑する爲めにも切要缺く可からざるなり、然れども之を爲さんには民法の力に依る可からず、如何となれば民法ハ只一個人を

のみ承認すればなり、左れば只普及一般の方法に依頼するの外なしとす、即ち家内の各員の皆及ぶ丈け家族の大切なるを感じ何を爲すにも先づ第一に家族の一員たるを思ひ居らざる可からず、生誕は是れ家族に生誕するなり、故に家族員として存するの特許を有する如く又其の義務を感じざる可らず、夫及び父は其の家族の要求は職業上の要求に均しき督促なるを知り常に自ら家の帯となりて全体を一致せしめ、妻及び母は己れの地位の貴重なるを感じざる可からず、子は亦強く家族の結び、凡て他の關係よりも大切なるを思ひ各人互に相信用し相保助して以て其家族を造らざる可からず、而して相信じ相助くることは實に家族の基礎なれば之を強ふする方法は如何なるものにて之を採用するを可とす。

都府に住む  
人民は一個  
人民主義は  
村野田間進  
めは田間進  
の生活は家  
族主義を助

現今人民繁殖の有様田舎より移て都府に赴くの針路若し終るに至らば家族を以て社會設立の基とするの傾向大に力を得るに至るべし蓋し都府の生活は其の多様なると其の利害の酷きとに由て次第に個人主義に傾き之に反して田間の生活は其の家相隔離もるに由て従て家族主義に赴くなり、都府に

存する所の富有の争、慾望の激動私慾を満足せんとする機会を求むるの念是れ皆個人主義を發達せしむるに足る、田間に存する處の僻穩守舊質朴等皆家族主義を生じしむ、故に異日人民繁殖の潮流其の方向を一變して英國の如く次第に田間を愛するに至らば家族を以て社會上及び法律上の中心となすに至るの傾向も亦大に勢力を得るに至るべし」

斯の如くならんを望むより先づ戀愛の正當に行はるゝを望まざるべからず、家族の成立は正婚より始まるものなり、共用婚姻の蠻狀ある處に於て決して良家族を生出するの理あるなし、夫婦は家族の基礎にして家族の社會の基礎なり、而して社會は即ち國家の基礎なりとす、左れば余輩の稱道する處常々國家主義にありと雖もスヰングの所謂家族主義とは毫も反せざる者なるを知る、即ち家族主義の正當

に發達したる者の國家主義たらざる可からず、然れども一  
 家族は國家の爲めにして國家は一家族の爲めにあらざる  
 が故に一家族を擧て國家の生命昌盛の爲めは犠牲は供す  
 るの精神なかる可からず、換言すれば國家の一大動物なり  
 (ブリッテリ)社會も一の有機物なり(スペンサー)一個人は  
 之を組成する細胞なり、故に一個人一家族の極惡無道にし  
 て國家社會に有害なる者なれば之を切り放すと恰も腫物  
 の腐敗全身體を及ぼすを防ぐ爲めに其の邊を切り放  
 すが如し、故に國家主義と家族を保護せんとする者なり、家  
 族は國家の秩序體制を保ち漸々發達して吾人の幸福を得  
 んとする者なり、而して愛情の順序を考ふるに最初と夫婦  
 の戀愛より始まりて親子となり朋友となり社會となり郷

土となり後ち全國家を愛する仁人君子となるものなり、噫  
 戀愛の正當を得ざるもの何んすれど愛國者たるを得ん、

## 第九章 戀愛と苦樂及び外物の聯感

## 苦樂の理

吾人は快樂を生ずるものに向て勉力し苦痛を生ずるものに背て勉力するものなり、抑も苦樂を發するは第一、外物が五官を刺激して神經に鼓動を興ふるが故に我が腦髓の運營力之が爲めに活潑動起するより快樂を發す、之に反して外物の刺激と腦髓の運營力と相撞着するときは苦痛の感を生ずるなり、第二、過去に於ける快樂の記憶を惹き起す時は快樂の感を生じ苦痛せる時の記憶を惹き起すときは即ち苦痛の感あり、第三、未來に於ける快樂を想像するときは快樂の感あり、苦痛を想像するときは苦痛の感あるなり、されど苦樂の感の管に現在のみならず過去の記憶、將來の想像も由て發するものなるや明かなり、例せば將來必ず斯

過去現在未來の快樂

くなるべしとの自信強くして其事の正當にして善事なれば快樂なりと雖も若し之れに反して惡事なれば苦痛を發するなり、即ち恐怖す、然るとも將來に屬する事と必ずしも惡事にあらざるも自ら斯くなるべしとの自信力弱くして疑惑心強きときは又同じく苦痛を感ずるなり、故に苦樂を惹き起すもの天然的社會的家族的境遇も由ると共に心の持ち次第にも亦大に關するものなり、世も左程に心配すべからざる事も心配する人を稱して「取り越し苦勞」と云ふ、要するに苦樂と外界の境遇より寧ろ精神の作用も由て之を抑揚するを得るものなるが如し、彼の聖使徒の如き未來の榮光を望みつゝ身を火中も投せらるゝも恐れざるに蓋し精神も於て「未來」の一點も重き自信を置けるも由る

なり、大人君子の死を恐れざるは「天命」と觀念して精神中に  
 凡人の知得すべからざる快樂界を懷き居るに由るなり、又  
 彼の學者政治家の熱中して妻子の病ひをも忘れ科學原理  
 の研究、器械の發明、國家の平和、外交の始末等に關して非常  
 の苦勞すると共に精神界は快樂を想像し又現實は於て其  
 等の事業自身が一の快樂となり居るなり、されば苦樂の精  
 神の作用は多く由るものと愈々明かみりて云ふべし、人の宜  
 しく苦界に彷徨することなく常に樂界に想像記憶を置く  
 ざるべからず、彼の苦中の苦を喫するものに非ざれば人の  
 上の人となる能はずとの教訓と人の懶惰放逸安閑等を戒  
 めたるものに過ぎず、決して快樂を捨て、狠に苦痛すべし  
 とよ非ず、換言すれば人に苦勞の機能を教ゆるは小快樂を

捨て、大快樂を得よと勸むるに外ならず、古句に  
 うれいさむうさむこいは一ツにて

戀愛と苦樂

世に樂むもの多し又苦むもの多し然れども如何なるも  
 のが戀する人の苦樂の變動に及ぶものあらんや、抑も戀愛  
 の情中に多少の苦樂相混合するものなりと雖も戀する  
 人は第一、如何なる時に快樂多く苦痛少なきや、又快樂少な  
 くして苦痛多きや第二、如何なる場合に苦痛變じて快樂と  
 なるや、又快樂變じて苦痛となるやを少しく研究せざる可  
 りらず、余輩は戀情の要素を調和するを以て快樂多く不調  
 和するを以て苦痛多しと斷信するものなり、又戀愛を仕途  
 くるに由て快樂多く、仕損するも由て苦痛するものなりと  
 信せずんばあらず、

望み少なき  
の戀

二百二十四

例せむ彼れに我より財産多し、身分高貴なり、學力も亦勝  
れり、彼れ我れを戀せざるに似たり、彼れの心の必ず最上者  
を望み居らん、否な已も情人を有するならん、と觀念せば如  
何に戀情を通せんとするも到底無効なるべしとの感發す  
るなるべし之れ即ち苦痛のある處にして、望みなき戀なり  
古歌よ

目よに見て手に取られぬ月のうち

桂の如き君よ予ありける

望み多き戀

又彼れ美人なり、彼れの父母の余を待遇するのみならず、  
彼れの我れを愛するの事實なり、彼れを得んよは何の妨害  
もなしとの自信力強きときいさしたる苦勞なく充足の快  
樂あるなるべし古歌に

春たてば消ゆる氷ののこりなく

君が心の我れにどけなん

種々の戀愛  
と苦樂

忍び戀のたなびく雲の過るといあらんが我戀の通ずる  
ときのあるやなしやと人知れず思ふなれば苦しきなり、逢  
戀のたねしあれば岩にも松のたひよけり戀をし戀ひはあ  
のざらめやんと茫たる蒼海の底深きやと逢ひたし逢へば  
樂しく逢ひねば苦し、見戀の顔見たく思戀の「冬川のうへに  
こはれる我れなれや下にながれて戀をたるとらむにて忘ら  
れず、隔戀の嘸今頃の如何ならん、と想像のみ逞しく不見戀  
の一層の想像を構へ待戀の今かくと家内も出入せしむ、  
而して別れ戀の斷腸の思ひを爲し恨戀の悲しく恨めしく  
悔戀の昔を今よなすよしもがなと悔やしく疑戀の妬まし

(一) 久しくも  
な住の居る  
な住の居る  
な住の居る  
な住の居る  
ありける

二百二十五



心期の作用  
戀の苦樂

くいやらしく通書戀の誠に不案心なり  
 要するに仕遂げざるを以て戀の苦しく仕遂ぐるを以て  
 快しとす、心理學上より見るときは所謂心期として待ち設  
 けたる感覺と實際の事が符合するときは快よして符合せ  
 ざれば不快なり、即ち逢へば必ず快談もあらん、見れば必ず  
 悦ばしあらん、別るいことなれば嬉れいからん、昔を今に  
 せば亦もや樂しからん、斯くあれば何の恨む事疑ふ事やあ  
 らんと心に期したる事の實際と符合せざれば苦なること  
 明かなり、符合するを望みつゝある間も又苦樂相半とする  
 なり、而して戀の熱度と達しざるるときは又大苦痛あるあり、片  
 思戀の如し、大快樂あるあり相思戀愛之れなり、古歌に  
 戀しきに命をかふるものならば

まにのやすく予あるべかりける

戀しどいたがなづけんことならむ

まぬとぞたいにいふべかりける

之れ實に戀の強盛なる中心燒點なるべし左は片思戀の  
 性質を論せん

片思戀の苦  
痛

彼れ我れを戀せず我れ唯彼を戀す、如何にかして愉快の  
 談も爲し、双手相携へて散歩も爲し飲食起寐も共にして苦  
 樂を別たんと思へば暮らせと更らに効なし、斯の如きもの  
 世上多くあるべし、即ち甲の乙を慕ひ、乙の丙を慕ひ、丙の丁  
 を慕ふて、丁の甲を慕ふ杯の事あるべし、爲すことなれば  
 敗ることなく執ることなれば失ふこと亦無かるべし  
 と雖も兎角取り度き一般人類の性情にして止を得ざる

ことなり、戀の種類を大別すれば相思、片思の二大門あるのみ、蓋し相思の門に達せんには先づ片思の門より入らざるを得ざるの運命あるが如し、一般に片思の苦しくして相思の樂みなり、左の二首の片思戀を穿ち得て妙なるものなり

心がへするものにもかた戀のくるしきものど人に知らせむ  
我を思ふ人を思はぬむくいにや

戀も進化の法則を免れず、廣漠なる處より精密なる所に至り、變る戀より變らざる戀に至るなり、片思より相思に至るも至理なり、思ふに片思の相思戀愛門に達するの第一着歩即ち出立點なるが如し、凡そ苦樂の感の大は精神の作用

に由ることを前述したるが曲亭翁の言實に余輩の意を得たる者なれば左よ之を記し後ち聯感の事を述べて止まん」  
「濁世煩惱色慾界誰れか五塵の火宅を脱れん祇園精舎の鐘の聲の諸行無常の響せれども飽まで色を好むもの、後朝の別れを惜むが故に只之れをしも響として憎めり、沙羅雙樹の花の色に盛者必衰の理を顯せども徒らに香を愛づるものは風雨の過ぎなんことを惡むが故に偏に、延年の春を契れり觀すれば夢の世觀せざるも亦夢の世に孰れか幻ならざりける思ひ内にあるものと龍華の三會も値ふと雖も凡夫出離の直路を知らず覺て復悟るもの、虎穴龍澤もありと雖も瑜加成就の快樂多かり」

(里見八犬傳)

萬物皆な戀  
愛の奴隷な  
るが如し

君を待ちくらせる宵は我がやどのすだれ動かし秋風を  
吹く、内に懺おれば外界の事物一々其情を左右し同意する  
が如し、戀情的の眼光にて事物を見れば同じく萬物我が戀  
を運動せしむ、萬物自身も戀の作用をわらざるかの感を生  
せしむ、

霞に匂ふ櫻花雨にしほる、海棠も黄金色なす山吹も軒  
端にうをる梅が枝をしたひ来てなく鶯も垣根にさける  
卯の花を問ひて鳴きつる杜鵑ことよ目立つは春の野の  
菜種の畑も狂ふ蝶其花のみう其種の油となりし後ちま  
でも焦れ

暮ふと觀すれば浮世の戀の海の如く天地は戀の現象なる

が如く見ゆるなり、然りと雖も之れ自らの内にある戀情を、  
以て外界を見たるなれば草木禽獸蟲魚も我が戀を左右し  
思ひやり増加せしむるの感發するなり、而して如何なるど  
き最も其聯感あるや、今之を左に論せん、

三月の櫻花

春の三月の長閑なる天地にあるも憂苦内にあれを樂し

からず、唐詩に

草色青青柳色黄、桃花歷亂李花香

春風不爲吹愁去、春日偏能惹恨長

之と同じく内に戀情あるときは山櫻花も何となくおうし、  
古歌に

あしびきの山さくら花ひならべて

かくさきたらばいたもこひめやも

露ならぬ心を花よおきそめて

風ふくごとよもの思ひぞする

葉繁ける草

三月の花も飛び散りて夏樹鬱蒼の時節となり、草葉の繁  
げる時は我意も斯く繁げたらんにの感發するなり、古歌  
に

わが戀のみやまがくれの草なれや

まげさまされせしる人のなき

このころのこひのしげけく夏草の

かりはらへどもおひしくがごと

夏の夕の螢

夏の夕、あとの程よき蚊やりの煙も、軒端に廻るころはひひ、  
飛んで火に入る夏の虫、焦るゝ螢も皆な己が友の如く、いつ  
しか聯感を起さしむるなり、古歌に

よひのまもはかなく見ゆる夏虫も

まよひまされる戀もするかな

夕されば螢よりけにもゆれども

ひかり見えねばや人のつれなき

あけたてば蟬のをりはへなきくらし

よるの螢のもえこそするなれ

故郷を懐ふ  
の時は夕暮  
に多し

遠き旅路にありて故郷の空をなづかしく思ひ父母の慈  
顔を拜み可愛ゆき姉妹と逢ひたくなる「ホーム、シック」なる  
ものゝ多く夕暮にありとす、戀人の感情も同しく夕暮よ於  
て甚た強きものなり、古歌に

からころも日もゆふぐれよなるとき

かへすくぞ人のこひしき

おぼる月夜  
秋の夕暮

蓋し吾人の情感の中夜暗黒にして咫尺を辨せざるか、又の  
白晝光明にして萬物燦然たるときよ於て煥發すること甚  
た稀れなるものなり、春の時候よ於てもてりもせずもり  
もはてぬ春の夜のおぼる月夜の情感を強からしむるもの  
なり、特に秋の夕暮の万感交々發するの時なり、彼の浮世の  
喧擾を逃れ、憂きこと聞かぬ所ありやと「マーブル、ハート」を  
以て自任したる洒々落々の西行法師も

心なき身よも憐れに知られけり

鳴立澤のあきの夕ぐれ

の感あり況んや多情なる妙齡の男女よ於て豈よ多感なか  
らんや、古歌よ

こぬ人をまつ夕暮の秋風の

いかにふけばかわびしかるらむ

いつとでも戀しからぬのあらぬぞも

秋の夕のあやしかりける

烽火城西百尺樓 黄昏獨坐海風秋

更吹羌笛關山月 無那金閨萬里愁

秋の夕暮に  
感情の發す  
る理由

秋の夕暮に色々の感情を惹き起すの和漢洋同一轍に出  
づ、蓋し美花既よ散り草木も紅葉して今將さに秋山落葉の  
景を呈せんとする時なれば何となく物足らぬ心地す、故に  
色々の事を思ひ之を料度して補へんとするより來るもの  
なり、例へば名所を見物せんとて歩行く途中は之を見れば樂  
しうらんとどの想像よて喜ばしく、其所に至りて之を見つゝ  
ある間の見んと欲しよる心期の實際と合着したるなれば

喜び甚だし、然りと雖も之れを見終らんとするときの忽ち  
心中に今後の見られざるべきかの感發するが故に、見るを  
望んで行く時の心地と、見つゝある心地と、見終らんとする  
ときの心地と、大に差異あるが如し、秋の夕暮の見終らんと  
とするの景なり、變化の甚だしき季なり、故に人自ら感發す  
ること著しきなり、而して其感や春の如き夏の如き勇みわ  
る快樂の事に非ずして悲哀の事なりとす、

夜に於て感發する理由

又夜の更け行きて四隣物静りなるときは日常煩雜なる  
業務の爲めに考へざりし事の發するものなり、心理學上よ  
り見るとき之れ所謂觀念の優越劣敗なり、終日煩雜の業  
務あるもの、其れにのみに考へを回らすが故に其業務に  
關するの觀念は暫らく優越となりて意識の舞臺中に活動

するなり、而して夜に至ては業務も終り所謂氣心静かなる  
が故に業務上の觀念の弱りて先きに劣敗となり居る觀念  
現はるなり、されば彼のいとも不潔なる淫猥の切賣りす  
る市又出入するもの、夜又多き素より社會的關係あ  
るも要するも右の理に由るが故なり、小人閑居して不善を  
爲すも多くの夜なりとす、

其例

「夜いさくふけゆく、玉もにあそぶをしのこはく、なつと  
あつれにきこえて、しめくどひとめすくなき、宮のうち  
のありさまに、さもうつりゆく世うなとればしつゝくる  
に、へいぢうがまねならねと、まことになみだもろになむ」

(源氏物語 若菜)

「人しれぬものおもひの、まぎれも御こゝろのいとまなき

やうよて、春夏すぎぬ、秋のころはひしづりよねぼしついで、かのさぬだのおともみよつきて、きよくうりし  
さへこひしう、おぼしいでらる」

(源氏物語 末摘花)

風流

古への人のみならず今の人よても閑日月を送るよあら  
で煩雑身を纏ふの境よありて尙ほ大度ある人ならんに  
花雪月を眺めて氣を慰むる者なるべし、風流の閑日月の間  
よ求めんより寧ろ喧擾熱する時よ於て求むるを價值あり  
とす、秋の宵初雁の鳴き渡るを聞て故郷よ書信を通せよの  
感發し鹿の音を紅葉ふみ分けて聞く時杯の實に哀れを催  
ふすなり、如何に大智識あるものも此感なくして可ならん  
や、古歌に

初雁の鳴き渡り

思ひ出で、戀しき時の初雁の

鳴て見たると人は知らずや

あきはぎのこひもつきねばさをしかの

こえいつきつきこひこそまされ

回なる月の涙

標先きに獨り佇みいと思ひに沈むとき胸の埋火も燃  
え立ちて紅涙滴々袖を濕し薄命の歎きも發せられて玲瓏  
の月ほんにまんまるな月の様に、我が戀の行末もまんまる  
よと願ふもげよ憐れなり、

中庭地白樹棲雅、冷露無聲濕桂花

今夜月明人盡望、不知秋思在誰家

之れは唐人の望月の感又倭人の歌よも

月かげに我身をこふる物ならば

つれなき人もあわれどや見ん  
てる月を暗みに見なしてなく涙

ころもぬらしつはす人なしに

其の心底の奥深き處、衆妙の湧き出づる心の思ひを酌み  
分けたらんに誰れか涙なからん、無情の月も涙あり、滴々  
の聲無しと雖も露となつて地に降り、草葉に啣ち虫の羽衣  
を濕すなり、戀愛の情と苦樂及び外物の聯感大凡斯の如し

第十章 戀愛と倫理及び誠實

戀情の強盛  
と倫理

あつた  
あつた  
あつた

夫れ戀情の最も強盛なる時の急用の事件あるもそれさ  
へ考ふる暇なく唯一心に情人を見るの快樂をのみ豫想  
して一里を千里と急ぐも尙ほおそき心地せられて夢中に  
なるものなり、又袂を分たんとするや名残りを惜み左視右  
顧して十歩を進めば五歩退き五歩進めば三歩を退くの有  
様にして影の形も見えぬまで見詰めながら躊躇すること  
あり、又互の快談に心を奪はれ之れが爲め急用も忘れて  
大に不信用を來し後日の禍となることあり、蓋し人の情感  
強盛なるときの之れが爲め多數の觀念の意識外に放逐  
せらるゝが故に事物に對して正當の判斷を爲し得ず、即ち  
強度なる情感の爲めに他の幾多の觀念の掩はれて一時隠



逃するものなり、而して情欲の旺盛なるが爲めに現在の消え易き快樂に熱中して未來の不幸を豫想するの餘地なきに至るの平凡なる常人に於て最も甚しとす、

「事に觸れてうちあるさまにも人の心を惑はし、すべて女のうち解けたる、いもねず、身をおしども思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにも、よく堪へ忍ぶの唯色を思ふが故なり、まことに愛着の道その根深く源遠し、六塵の樂欲多しといへども、皆厭離しつべし、その中よ、たゞかの、惑のひとつ、やめがたきのみぞ、老ひたるもわうきも、智あるも愚なるも、かゝる所なしと見ゆる」

(徒然草)

夫れ然り、然りと雖も人の人たる所以は、能く情欲を自制するの意志、剛強なるあり、若し夫れ盲目的情欲に支配せ

人の人たる所以

戀愛と快樂

られて理性と徳義を掩はんとするもの、最も微弱にして無用の人物と云はざるを得ず、故に余輩は此篇に於て少しく倫理的眼光を以て戀愛の運動すべき具合を説明せん、  
第一、快樂——快樂なるもの悉く善事と非ず、苦痛なるもの悉く惡事にあらず、快樂にも野卑なるあり、高尚なるあり、忽ち消失するものあり、永く繼續するものあり、故に吾人の確實にして永續し、且つ純潔なるものと、野卑にして消失し、易きの快樂を比較し、必ず道理性の教示を従ひ、平穩なる快樂を求めざるべからず、慾望の満足は快樂なりと雖も、慾望にも高尚野卑の別あり、國家社會の爲め心身を捨て、己れの理想を行ひ幸福安全たるを願ふ如き、高尚なり、一家團樂妻子無異なるを願ふ、又之れ高尚なり、然れとも一時の

情慾を満足せんとして心身を損害し荒淫乱行以て諸方の子女を惱ましむる如きを願ふの野卑なり、眞正の快樂は容易に得べからず之を得んと欲せば須らく目前の消易きものを捨て以て將來の快樂に望みを置らざるべからず、

不正の親念

第二、正、不正——正、不正の親念の常識あるもの皆之を有す、素より正、不正、善惡、苦樂、美醜に對する一定の確乎たる標準あらざれば夫等の各社會の風俗習慣教訓に従て判斷するの外なしと雖も正直を愛して邪曲を忌み美妙を好んで醜態を嫌ひ快樂を欲して苦痛を除去せんとするに至ては全世界到る處一致せざるなし、而して人は自由に善惡邪正を撰擇するの能力あるものなれば自己の行爲は自己の責め歸せざるべからず、固より自己の行爲は外界の境遇より

個人と社會の關係

影響せらるゝ事多し、故に犯罪藝娼妓、離縁、私生兒、私娼、自殺等の統計數より其社會の品位如何を知ることが得るなり、然れども余輩は一個人が社會の朱に交はりて赤くなることの多きを認識すると同時に各個人は社會平坦上よりも高尚なる品位能力を有するものにして、一個人の業以て社會の朱を奪ひ百世の下僇夫をして立たしめ千載の下頑夫をして廉ならしむるの勢力あることを認識せざるを得ず、ナポレオンの佛國に於けるカント、ビスマルクの日耳曼に於ける孔孟の支那に於ける浮屠氏の亞細亞に於ける基督の泰西に於ける其他學者英雄豪傑なるもの、勢力の實に別社會を新設しうるの觀を呈することあるなり、果して然らば人は單に社會の境遇にのみ支配せられず屹然と

して立つの勢力なくんば萬物の靈たる名譽を與ふるに足らず、若し夫れ自己の行爲の單に天然と社會の境遇に歸して可なるものなりせば善惡邪正曲直の別何うあらん、乱臣賊子孝子善人何かあらん、人の理性を具へて理想を有するものなり、故に受動的なると共に自動的の動物なるを期せざるべうらず、茲に於て乎社會の改良も亦望むべし、夫れ戀情を妄用して汚穢に流れ零落に陥り親の命に背きて猥よ穴隙を鑽り墻を輸えて自暴自棄する如きは、昏に自己を害するのみならず社會の風俗を壞乱するものなり、正不正の別戀愛上豈に顧みずして可ならんや、

第三、幸福——世又は國家の法律、或は安身立命、或は主觀的の理想、或は宗教上の本尊、又は天地の大法を以て倫理の

國家社會の幸福昌盛の倫理の基本なり

基本とするものあり、而して余輩は社會の幸福、國家の昌盛を以て倫理の基本とす、之れ萬有の大法に適合するものなるを信するが故なり、苟も社會國家の爲め利益あり幸福となるものなれば、身命を犠牲として盡力し、敢て一己の損害を問はず、苟も社會國家の損害となるものならんに、敢て一己の利益を顧みざるなり、之れを以て萬事萬端社會の幸福、國家の昌盛の爲めに計りて、單に利己の爲めにせず、又實利の爲めにせず、抑も實利なるもの、圓滿は一方より見るときは幸福なるが如し、雖も冷淡にして嫌惡すべき利己主義も、陥るの恐れなきにあらざるなり、思ふに實利悉く幸福を生せず、故に正義に熱中して實利に拘泥すべからず、蓋し社會の幸福、國家の昌盛は善徳、正義、誠實の相合して快樂

社會の幸福と戀愛

と實利の和するより来るものなり、戀愛の情は幸福の給與者なり、然りと雖も野卑の姦淫とならん乎、人心の元氣は腐敗し辻々浦々淫猥の毒氣を染み國家の活動終に睡りて所謂ソドム、ゴムラの轍を踏むに至らんのと、何となれば剛柔陰陽は和合すべしと雖も柔弱の分子のみよして萬物組成せらるゝものに非ればなり、不潔の戀愛を欲するもの、社會の不幸國家の寂滅を來すものに外ならず、

第四、良心——良心の裁決に従ふとき、必ず實利を生じ、快樂を産し、義務責任を果たし、自他を益し、且つ正義たり、善徳たり、誠實たるや否やは余輩茲に明證する能はずと雖も其命令に従ふとき、多くの不可なることなしと信するものなり、抑も良心なるもの、漸々進化して成りたるものなり

良心の進化

れば、智識、風俗、習慣、教育の如何によりて、各個人、各種族、異なるあり

難波の芦は伊勢の濱萩、彼れの善徳とする所、我れの邪惡たることあり、之を以て良心に従ふたる行爲は悉く完全無缺なりと云ふを得ず、されを此良心をして鋭き劍の如く磨き上げ益々發達せしめんにと智力即ち理性の發達を望まざる可からず、彼の放蕩子の妓樓に出入し、無頼漢の痴情に迷ひ本妻を捨て、假妾に狂ふ如き人も前には必ず良心の責めを受けたるに相違なしと雖も習は以て性となり徳性腐敗して更らに良心の呵責を受けざるに至りたるなり、即ち最初は恐怖を以て爲し、次は疑心を以て行ひ、夫れより無意識的に動作するものなり、社會の良心亦斯の如し、藝娼妓、私

良心の呵責

生兒、男色、女色等より暗殺、自殺、竊盜等の多少は皆社會良心の強弱正否に由て其赴向を異にするものなり、而して一個の良心と社會の良心を完全ならしむるは獨り理性、徳義の力、換言すれば正當なる教育に由るの外、又他事なしとす。

第五、名譽、耻辱——名譽は自己を高め、耻辱は自己を低くするものなり、正義を行ふて快樂を得、道德上の満足を得ると名譽なり、不正を爲して悔恨し、自己を以て自己を毒するは耻辱なり、名譽は愉悅、歡喜、平和を來し、耻辱は悔恨、悲哀、衰弱を生ずるものなり、故に人の名譽を欲して耻辱を忌む、正直の戀愛と耻かしきものも非ず、不正の戀愛は名譽を損害するものなり、遍照或時内裏へ參られけるに、今宵は月も白く、ねもしろきに酒もりして遊びなんど、いまりふまへと女

名譽と耻辱の情性

官たちいひかけたるに

女郎花おほる野邊にやせりせば

あやなくわたの名をやとむべき

とてすげなくかへらんとするに馬の内侍

花ゆゑにあだなる名をば流さなん

さけば袂をひきもといめず

と、誠の戀愛なれば耻らはしきものにあらざるを現はしふる一例なり、（通鑑）一國一社會に於ても亦此理に外ならず、藝娼妓の如きと將さに耻ぢべき戀愛にして國家の元氣を損害し、國家の名譽を破却するものなり、彼れ決して永久の快樂を與へず、社會の進歩を助け、國家の生命を完全ならしむるの要素よあらず、正義の性質を缺き、家庭を亂暴し、青年

藝娼妓の存在は國家の耻辱なり

子弟をして活氣を失ひしむ、之を以て下等社會をして益々貧弱たらしめ不良の性質、不美の習慣を造出するものなり、社會の良心必ず之を呵責せざるべからず、

性質と習慣  
ハ變化するを  
得べし

第六、性質、習慣——性質は容易に變化すべきものに非ずと雖も要するに順應アダプテーションの如何に由るものなれを境遇を變へ正當の教育を與ふるに由て尙や變化し得べし、習慣ハ第二の天性となるものにして吾人の幸不幸に關係するものなれば習慣亦理性の教示に従て變せざるべうらず、善男善女必ずしも一時になりたるに非ず、惡男惡女亦然り、小善より大善となり小惡より大惡となるものなり、社會の性質習慣も同じく小より大となりたるなり、夫れ自然淘汰の作用は常に動植物界に止まるものに非ずして人間社會の上にも

社會上の自  
然淘汰適種  
生存

働くものなり、而して社會上に於ける作用ハ結局善者を生存せしめ惡者を滅亡すること明かなりと雖も社會の組織は複雑なるものなれば時に善者を滅亡して惡者を生存せしむることなきにあらず、即ち藝娼妓の如き不潔物をして適種生存の觀あらしめ不良の性質習慣を永存せしめたるハ一の事實にして剛毅敢爲の精神維新前より今日の青年に於て少なきハ亦之れ一の事實なり、果して然らば社會上に於る適種生存の自然淘汰は結局ハ於て必ず誤りなかるべしと雖も時と所に由て一時誤りの觀なしと云ふべからず、社會は活動物なり、故に之を組織する人類の精神如何に由て天然的勢力の妨げざる限りは改良することを得るなり、されば宜しく放任主義と去りて干涉主義を取らざるべ

からず、換言すれば、人の淘汰即ち教育を以て、社會の勢力を導き、慾望を満足せしめ、性質習慣を改良せざるべからず、戀愛の正否如何に依て個人と社會の性質習慣は左右せらるゝものなり、

己れの欲する處を人に施す

第七、社會——社會に對する吾人の義務は他なし、正當なる道徳と利潤に従ふて己れの欲する處を施し、欲せざる處を施さざるあり、若し夫れ淫慾を逞ふし、金錢を酒池肉林に浪費するに誰れしも欲する處なりと雖も、正當の利益を得ず、又公共の道徳に背反するものなれば、宜しく之を止べし、戀愛上に於ても、苟も不良の同伴を社會に惹き起すものなれば、宜しく之を止めざるべからず、即ち社會の幸福、國家の昌盛を計るの範圍内に於て、戀愛を運動せしむべきなり、

「我身のせつなき戀に、世の中の情を知り、物體の人につらからせ、遂には仁愛の心れこりて、召仕者までにおもひやりある粹な捌、人を助け世を救ふ、戀の道の仁といふべし、又人の妻子の大切を辨へ、夢狂ひ手を孕はせやるせなき戀慕の心も、じつと辛抱せねばならず、本妻に義理立て、つらい離別するもあり、是此道の義なるべし、縁深ければ、ふらひはど、いと、夫を大事にかけ、假令あまへるとも、慮外はすまじ、是此道の禮と云ふべし、著者曰、夫も亦妻を大事にうけ、慮外はすまじ、有夫姦を咎むるときは、有妻姦も咎めざる可うらず、人目を恐れ、世間へ慎み、場合手管に思案あきらめ、愚ろし、つゝ戀のまられず、これらは戀の智なるべし、つゝ一通りのいひかはせにも、一旦の約束を

守り、一生、淋しい後家をたて、苟且のはづみにも命惜まぬ時宜も多し、是此道の道なれば五常よはづれし戀ならば戀にのあらず放漫者なり」

(戀五常)

夫れ斯の如し、之れより左に戀愛上誠實の分子を要することを述べん、

學なく才なく國家社會よ對する正常の觀念なく政治法律經濟財政の何物たるを知らず、曉の星を見て野原に至り、山林に入り、月を背よして晚鴉に後れ家に歸る、月洩る伏家の賤の女も、深山の奥の杣人も、磯邊に世わたる海士の男も、雲井よ侍る公達も、戀には誠をこむるなるべし、誠なきの戀は戀に非ずして淫なり、古歌に

斯くまでよいつはり多き世の中に

戀ばかりこそ誠なりけり

飛鳥川ふちは瀬になる世なりとも

思ひそめてん人は忘れず

戀愛の要素  
上第一位に  
あるものは  
誠實の分子  
なり

然りと雖も世は誠を以て天を貫かんとする人のみを以て充つるに非ず、中には淫を欲して子女を苦しむる者あるべし、誠らしく遇ひて末は野となれ山となれの邪念を包むものあるべし、世の中には何か常なる飛鳥川昨日の淵も今日の瀬となる人もあるべし、實に節物風光不相待して年々歳々花相似、歳々年々人不同、變らじと思へど變る世の習ひ變ることのみ變らざる有爲轉變の世なるかなど歎息する寡婦もあるなるべし、蓋し變るの源因よ至ては此章の論する所よあらざるを以て暫らく之を措き茲には戀愛上の調



和を保ち永く相思を續けんに誠の心は第一要するものなるを云ふのみ

孟子曰三代之得天下也以仁、其失天下也以不仁、國之所以廢興存亡者亦然……今惡死亡樂不仁是猶惡醉而強酒と、孔孟の所謂仁義、基督の所謂愛なるもの其實一にして國家平かなるの基本なり、戀愛上の興廢亦之れに由る、されば戀をせば戀を知り、戀を知りたらば戀を悟り、戀を悟りたらば戀を慎み、以て其間に誠實仁愛の分子を包含せざるべからず、古歌に

そこひなき淵せのさわぐ山川の

浅き瀬にこそあだなみりたて

人を思ふ心木の葉にあらばこそ

戀愛に法あり

風のまに／＼ちりもみだれめ

深き川は流るゝに聲なし、良き教育を受けたる人の放蕩逸樂に流れぬ戀の夜市に出入せざる亦理あるなり、浅き瀬に却て噪かしくあだなみの立つなり、無思慮の男女が猥に穴隙を鑽り、牆を越え親の意見友の諫めを入れず、狂ひに狂ふて更らに恬として願みざる如きは戀のふかきにあるより寧ろ淫に深くして精神的關係より肉體的關係に重きを置くものなり、夫れ戀を知りて戀する戀は戀を仕つゝ戀に筋あり、戀を悟りて戀する戀は戀を仕つゝ戀に道あり、戀を慎みて戀する戀は戀を仕つゝ戀を法あるなり、而して誠を盡すに於ては必ずしも相互に爲さざる可からずと雖も友情の單純なるものと戀情とは著しき差異あるものなれば

一方のみ盡すことあるべし、然れども既に一方の盡す處は  
双方の盡すに至る出立點なれば彼れ盡さずとて我れ盡さ  
ずして可ならんや、夫の尾生は女と約束して梁の下に待ち  
ける、女來らず水深く至れども終ゝ去らず柱を抱ひて溺  
れ死せしと云ふは誠中の誠ならんが之れ極端にして余輩  
の感服せざる所なり、思ふ、死せずして待つに若かざるな  
り、されば一方の盡す處も亦程度の存するを知るべし、古歌  
に

つれなくもわれさへ心かはらずば

さりどて中のたえやはつべき

くれなるのはつ花ぞめの色ふかく

思ひし心われわすれめや

金錢と戀愛

の誠なりるべからず、世の金錢を以て戀を満足せんと欲  
するものあり、然れども精神の金を産むを以て良しとす金  
を以て造り出せるものは良き精神に非るあり、今日に於て  
の金錢の力實に強大となれり、吾人の宜しく金錢を得ざる  
べからず、然れども金を以て戀を買はん、とす、に至ては大  
に誤れるものなり、人或は云はん、萬恨千愁、黄金より出て、  
黄金に隠れ逢ふも別れも兼言も黄金に始まりて黄金に終  
る、比翼の鳥も連理の枝も黄金の光なければ飛ぶ事叶はず  
と、實に黄金不多交不深の世なれば夫れ或は然らんと雖も  
金を以て戀を買ふこと能はざるは猶ほ物質的の衣服書籍  
器械諸道具の金を以て買ふも大知識となるには忍耐、勉強、  
自制の力と以て買ふべく、金を以て買ふべからざるが如し、

戀の金を以て買ふを得ず

社會上は物質的文明の進歩と共に其間も金も山らざる  
精神的の能力の進歩を要する如く一己人々於ても亦然り、  
之れを以て至誠は戀を繼續するの第一要素なること豈に  
喋々するを要せんや、

因に云ふ本篇は昨年四月上旬起稿し下旬に脱稿した  
るものにして第七章は昨年十月中少しく訂正を加へ  
新たなる二三の例を入れたり其他は以前の儘なれば  
章中支離滅裂の觀あるべし讀者之を諒せよ

明治二十四年一月

著者識

### 相思戀愛の現象前編終

明治廿四年三月廿八日印刷  
同 年四月十日出版

定價金四十錢

版權  
所有

著者

東京市麹町區飯田町五丁目二番地

布川孫市

發行者

東京市日本橋區本町三丁目十七番地

原亮三郎

同

印刷者

濱田巳助

同

發兌

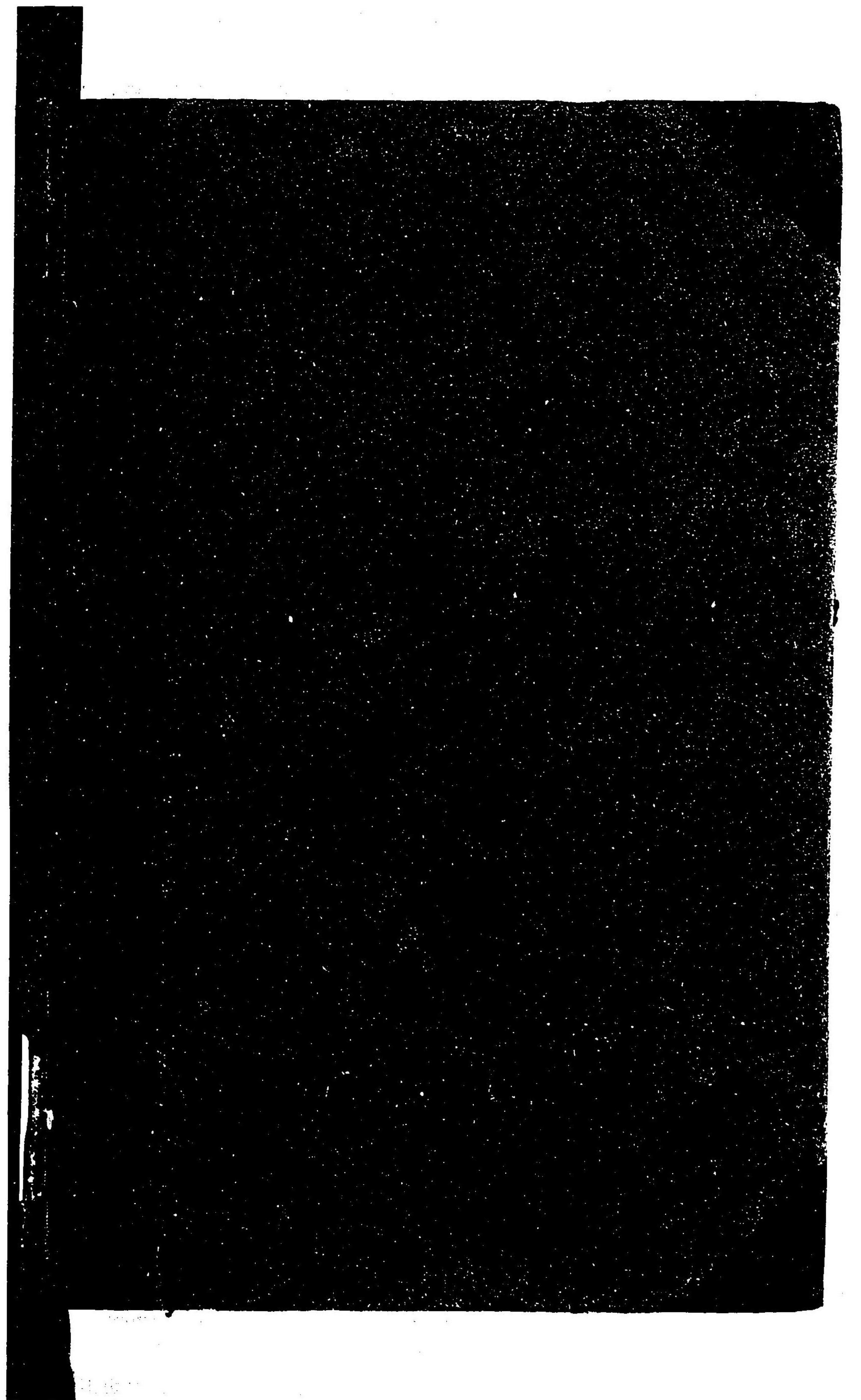
金港堂本店

大賣捌

大坂市東區南本町四丁目二百廿二番屋敷  
金港堂支店

7.12.23

689  
2



68

2

Ⓜ

027353-000-6

68-2

相思恋愛の現象 前編

布川 孫市 / 著

M24

ADJ-0108



